

さようなら酒井邦恭オーナー



追悼号

分社

分社グループ会報

《発行元》
分社理念研究所事務局
〒104 - 0061
東京都中央区銀座6丁目12番1号
TEL 03 - 3574 - 9542

去る八月二十五日、分社グループ代表の酒井邦恭氏がご逝去されました。（享年八十一歳）

八月三十、三十一日に東京都港区の泉岳寺において近親者にて通夜・葬儀が執り行われました。

九月十五日に「お別れの会」が、東京都港区のグラランドプリンスホテル新高輪国際館パミールにおいて行われました。

ご遺族、分社グループの役員、従業員、OBをはじめ、各方面より生前酒井オーナーと親交のあった大勢の方々が参列、弦楽四重奏の厳かな響きが流れるなか続々と献花をされました。懇談会場には酒井オーナーの展示パネル展が設置されており、参列者は懐かしくご覧になりオーナーを偲んで話が弾みました。酒井オーナーのお人柄とオーナーがいかに慕われていたかが顕れる会になりました。

お別れの会実行委員長 二ご挨拶



皆様、本日は誠に有難うございます。オーナーが生きておりましたら、きつと手を合わせて「皆、有難う！」と答えたのだと思います。遺影の表情の通りだと思います。

先月二十五日に酒井は亡くなりました。平成十六年に癌であることが判明し、療法を続けながら、一時は危篤という状況もありましたが何とか乗り切り、その後

元気に皆様の会社を訪問させていただいたりし満足な療養生活を送ってきた次第であります。

六月までは意識もはっきりとし健康な人と変わらない状況でしたが、七月になり入院、八月二十五日に亡くなるまで病院から出ることはありませんでしたが、亡くなる前々日まで声を掛ければ返事をし、頷く事もあり意識ははっきりしておりました。

亡くなる二日前の二十三日の朝三時頃、病院から私のところに電話があり、「酒井さんが首からカテーテルを入れて栄養補給をしている管を自分で抜いてしまいました。」と。酒井は織田信長が好きで、幸若舞「人間五十年 下天の内をくらぶれば 夢幻の如くなり」とたびこの世に生を受け 滅せぬもののあるべきや。これを時代劇では、桶狭間へ出陣する時と本能寺の変の際に、織田信長は舞うわけですが、酒井はこの謡曲が大好きでした。この管を抜けば自然死が待っているということを知っていたのだと思います。痛みは全く無く、苦しむことも全くありませんでした。二十五日の夕刻のことでした。

三十、三十一日に現役の社長及び社長経験者、親族の六十余名で泉岳寺にて通夜、葬儀を執り行いました。

酒井は昭和三年に生まれ、旧制麻布中学を十八歳で卒業し、昭和二十二年に会社を興します。戦後の経済発展に伴い成長していきました。分社グループは、昭和三十年代、四十年代を共に働いていた

方たちが発展の支えとなって、今日に至るのです。

私と親父の事を触れます。男親と息子というものは磁石の同極のように反発しあうものであります。私は二十代の頃、親父から「お前は会社で一番要らない人間だ」とか言われていました。こちらも若かったものですから、「それならば、もう会社には行かない」と博物館の仕事に夢中になったのであります。

親父の本心というのは、多分、一緒に一番いてもらいたいのですが、いる以上は社員にも認められる人でなくては・・・という思いからの発言だったと思います。私はおよそ二十年間、四十代初めまで会社にほとんど関わらず、平成四年になって大陽工業に戻り今日に至るのです。男親と息子の確執は、大陽に戻ってからも暫くは続きました。平成十六年十一月に関山オーナーが亡くなりました。酒井も既にその時肝臓癌を発病していました。その後いろいろありましたが、今、亡くなった後の整理を進めていくと、親父が結構色々と考えていてくれた事を知りました。人は身近な人を喪つてみて、初めてその人の思いやりを知るといいます。しかし、気づいた時には既にその相手は去つてしまつています。この世はその繰り返しなのでしよう。

この四月頃、銀座事務所に行くと、「会社はどうだ？」と聞かれ、私が「大変な状況ですよ」と答えると、一段と大きな声で「そんなんじや駄目だ！」といわれました。何が駄目なのかよく分かりませんが、今思うと『大変』という言葉自体を言うことがいけないという事だったようです。今日展示された書の中にもありますように、「もつと仕事しろ」ということなのだと思います。私たちも今日この時を機会に、仕事に一層邁進する事にしたいと思えます。本日は誠に有難うございました。

お別れの会実行委員長

酒井 陽太

(大陽工業株式会社)



喪主 ご挨拶

本日は亡き夫酒井邦恭のお別れの会にお越しいただき、有難うございます。

今日皆様とお会いしております。すと、昔の事を思い出しました。皆さんが知らない、会社を始めた頃の事です。当時従業員は五名ほどでした。皆それぞれ仕事の間

合わなくて、夜遅くなつてしまします。

その時、私が出来ることは食事を作つて持つて行く事だけでした。ですから、お葱とお豆腐のお味噌汁を持つて行き、飲んで頂く日々を、随分長いこと続けたような気がします。今はこうして従業員が増え、皆さんとお会いし、その当時のことが懐かしく思い出されます。

そして一番印象に残つていまして、段々従業員が増えますと、学校を巣立つたばかりの若い人が入社するようになりまます。彼らはお給料を貰つと、皆さん蒲田のパチンコ屋に行くようでした。そして、そこでお金を使い果たしてしまうのが、何となく分かりました。その為、今は亡き夫と蒲田のパチンコ屋の入口と出口で挟み撃ちにして連れて帰つたことが何回かあります。

それらを考えると、皆さん巣立つて、今こうしていらして、会社を支えてくれた陰にはそれぞれ色々と思ひが有つたと思ひます。そんな当時の事が懐かしく思ひます。これからは皆さん、どうぞ余り浪費をしないように。そしてまた、有意義な歩き方でやっていって欲しいと思ひます。

喪主 酒井 ミツア

酒井オーナーを偲んで

社長の役員の方々をはじめとし、生前酒井オーナーと親しくされていた方々より、お別れの言葉を頂きましたので、紹介させていただきます。



オーナー代行
木村 澄夫
(株式会社分社理念
研究所)

大きい組織より、これから成長発展し、山あり谷ありの経験豊かな人生を過せる会社「それが俺の会社だよ、どうだ来いよ」と言われ四十五年になります。富士宮の公益法人の継承時、雪、霧の危険な悪路をオーナーの運転で毎土日通い、横で寝てしまい運転免許を取得するキツカケになった事。マンション建設で数十億円の資金調達、住民対策、テナント募集等々の体験。直近では、グループ経営状況の報告の時は、目をキリッと開き厳しい質問を受け、物作り屋魂、事業家魂と強烈な精神力に、ただただ感銘し頭が下がるばかりです。

酒井オーナーの教えは、グループは基より多くの人々の心に生き続けます。グループの成長発展する私共を末永くお見守り下さい。感謝と心よりご冥福をお祈り申し上げます。

合掌。



社長会長
篠崎 尚利
(株式会社大昌電子)

五年前に関山オーナーが、そして今年には酒井オーナーまでが亡くなり、分社グループはもとより私にとっても大きな心の支えが消えた感じがします。私は四十年前に大学卒業と同時に太陽工業・八王子に入社し、三ヶ月後に創業したばかりの大昌電子に移籍しました。

酒井オーナーからはいつも、「いいか篠崎。仕事は自分のやりたいようにやればいいんだ！ 仕事では誰にも遠慮はいらんぞ！ 思いつきりやれ！」お陰さまで売上がゼロ口からの会社の創業期を経験させて戴き、無我夢中で思いつきり仕事に取組める楽しさ、幸せを感じる事が出来ました。また「会社は社員が財産だぞ、何をあいても人を大切にすることだ。だからこそ顧客第一でやるんだ」と言っておられた。今でもその声が聞こえそうです。社員が仕事を通して輝く会社のDNAを後世まで伝承して参ります。きつと今頃は関山オーナーとも再会されていると思います。心からご冥福をお祈りすると共に、今度は千の風になってこれからも私達の指導をして戴きたく思っております。

合掌。

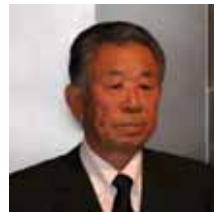


社長会副会長
眼目 毅
(株式会社幸大ハイテック)

酒井オーナーが他界されて一ヶ月が過ぎました。今もそれが信じられません。

突然「酒井だけど、これから工場に行くよ」なんて電話がかかってきそうな気がします。約四十年間の長きに渡り、どこかで私の人生を支えて頂いた人を失ってしまいました。どんな苦労にも音を上げず、ジョークとブラック・ジョークで誰でも惹きつけてしまい人望が厚かったオーナー、そんな酒井オーナーに分社精神をご指導頂いた事が幸せだったと思います。

故人との最初の思い出を語ると、四十年前、社員旅行の帰りに偶然、旧目蒲線でご一緒になり、恐れ多くて思わず身体が震え無言でいる私を、包み込むような暖かさで会話して頂いたことが忘れられません。



経営委員

菅 実

(フアナックマグト
ロニクス株式会
社)

酒井オーナーを偲び追悼の言葉を申し上げます。

酒井オーナーは、その類稀なる独創力、不屈の起業家精神、そして人間味豊かな性格をもって分社グループを今日まで育てあげられました。

その開拓者精神にあふれた積極性は、常に後に続く我々の指針となり、また頂戴した多くの言葉は、経営という大海原を航海する我々の羅針盤であり、進む方向を照らす灯台でした。今に思えばどれだけ多くのものを譲り受けたか計り知れません。

酒井オーナーの半世紀を超える足跡は、分社グループのみならず業界の発展の歴史です。その偉業に、心からの感謝を捧げ、謹んで御冥福をお祈り申し上げます。



佐々木 弘人

(株式会社大昌電子)

私のかげがえのない酒井オーナーが、帰らぬ旅に出られた、信じられないことです。叱咤激励のお声を聞くことも叶わなくなりました。今日の私があること全てに、感謝しております。厳しい時も優しさを忘れない親心で分社哲学に基づく経営が、多くの従業員に夢と希望を与えてくれました。自由にやれ、自立せよ、競争に勝て、社員を育てよ、仲良く楽しく、管理するな、統括するな、等、全てに強烈な思想が酒井オーナーの経営哲学であり、その教えで分社を育ててこられました。心配ばかりかけ悔やまれることばかりですが、世代は変わっても、現在の不況に勝つ為にも、オーナーの経営哲学を引き継いでいくことでオーナーに恩返しをしたいと思えます。

私の五十年の長き務めが出来たことも、仕事を任される怖さもありましたが、夢を持ち、挑戦し、目標を達成する喜びを覚えていただきました。オーナーを信じ、責任を持って会社経営が出来ましたことは一生忘れません。心よりご冥福をお祈り申し上げます。



丹野 喜三郎

(大陽工業株式会社)

右手人差し指一本だけを上下に動かして、有難うの気持ち薄すらすらと微笑んだ笑顔で表し、茶目つ氣に見送って下さったのが、ご逝去の十一日前の八月十四日午前のことでした。入院先の病室にお見舞いし、一日も早く退院して銀座の事務所まで、一緒に食事の約束をして退室する時の事です。

今になって思うと、数年間のお付き合いがあり、社主に請われて大陽工業に入社して、爾来四十二年余、望外の素晴らしい薫陶を受けながら、経営の将来を語り合ったり、ある時は余儀無く撤退しなければならぬ場合に遭遇したり、過ぎ去った過去が走馬灯のように社主の脳裏を過ぎ、その諸々に万感を込めての社主らしいバイバイだったような気がしてなりません。

九月十五日の「お別れの会」の会場に、過去の思い出を写真で追ってありましたが、その中の一つに中国政府の招請で人民大会堂での「分社経営」に関する講演会の写真がありました。私も中国政府から随員としての招聘状を頂き随行いたしました。

聴講に参加された方々は、中国全土の主な政府系優良企業のトップクラスの方々でした。質疑に入り、活発な発言があり、中には涙ながらに「人を中心」にした経営の素晴らしさを賞賛し、またある経営者は分社経営の素晴らしさに感動し即興で、漢詩を作って朗々と読み上げた後、壇上の酒井社主に向かって、先生は後光が射していますと結びました。

人間中心に考えた経営システムは、国境や人

種やイデオロギーには関係ないことを痛感いたしました。

縁あって、分社経営の一員として、日夜素晴らしい活躍をされている皆さんの、その後の手柄話を沢山持って、オーナーと再会したいと思っております。



志摩 忠

(大金電子工業株式会社OB)

合掌。

精神的に大きな柱が亡くなった。

故酒井邦恭氏、私が最初にお会いした時は、私の印象に残る出会いでした。

新聞の片隅に載っていた求人広告に軽い気持ちで応募し、前の会社で労組の幹部をしていた事も正直に話し、半ば諦めて帰ろうとして会社の出口に向かっていたら、ランニングシャツ姿で汗を掻いて水を撒いているおじさんが、おう頼むよと声をかけるので変な守衛さんだなあといい思ひ、採用決定後に改めて会社の幹部とお会いした時は、あの変なおじさんがこの会社の社長と気が付き驚いた次第です。以来いろいろと紆余曲折がありました、それが足掛け四十五年に亘る付き合いの始まりです。

亡くなられる前夜、電話でありがとうという声を忘れる事が出来ません。

長い病苦の床から開放されて今はゆっくりお休み下さい。

合掌。



宮下 研一

(株式会社分社理念研究所)

酒井オーナーが亡くなってしばらくは、我ながら情けないほどめそめそしていた。ある人間を思い出して、ずっと涙が止まらないなんて初めての経験だった。PH Pという出版社の編集者として出会ってから、三十年近い時間が経っている。社に出してしばらくしての三十年と言え、我が人生のもっとも元気な時間である。酒井オーナーに出会ったのが運のつき、松下幸之助の子分から「分社」の親分の草履を揃えることになった。これほど面白い人物を間近で見、話を聞き、文章を書き、カバン持ちで旅行した幸運。オーナーはどう思っているか分からないが、私は幸せだった。オーナー、あなたの考えは凄い。もっともつと大声で伝えて行きますよ。あの世で必ず報告しますから。



酒井オーナー秘書

青木 美咲

(大陽工業株式会社)

「おい、青木」：頭の奥の深い所からも酒井オーナーが呼ぶ声が響きます。

「おつはよーん」：毎朝軽快なフットワークで出社してくる関山オーナー、いつもこんな感じでした。

私がお二人の側にお仕えさせて頂いた時間はいつだって貴重な学びの場でした。

ある時、机に向っている酒井オーナーが「おい青木、俺ってどんな人間なんだい？」と何やら含みありげに聞いてきました。あまりに唐突だったので「ええー？」と言ったきり、しばらく二の句が継げませんでした。「私には大きすぎてよくわかりません。でも、人とは違ってちよつと変わった人です。」そう答えるとニッと笑って「そうだよな、俺って変わった人間なんだよな、アハハ。」とまんざらじゃなさそうだったのを思い出します。

酒井・関山両オーナーと交流のあったすべての人の想いを集め、それぞれをギョツと一(ひと)まとめにして人形(ひとがた)を作った「酒井オーナー・酒井邦恭」・「関山オーナー・関山博」の人物像に少しは近づくのではないか、そんな風にも思っています。

邦「なに？俺が死んだ後のこと？そんな事知ツちゃあねーや(笑)」博「よお、邦さんよー、そんなこと言うもんじゃあねえよ」



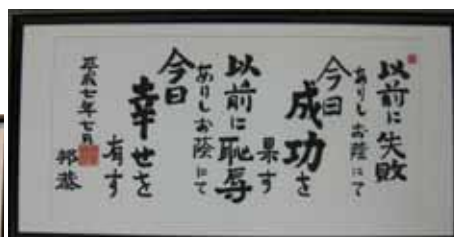
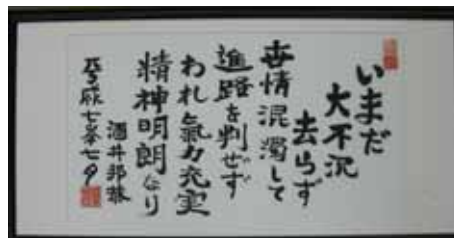
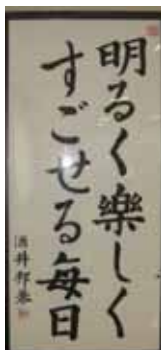
・・・邦「なあーに、みんなに任せたんだから、任された者が一所懸命にやるでしょ、大丈夫ですよ。」博「そうは言ってもよお。」・・・

私は酒井邦恭と関山博の下で働けたことを心から感謝しております。これからもグループと共にあり、喜び、笑い、泣き、叱り：いつまでも見守って下さいますようにと願うばかりです。またいつか一緒に仕事をさせていただけると、少しでも成長していたいと思っております。ありがとうございました。

お別れの会にて展示された
写真や書など



酒井邦恭氏のご逝去を悼み、心から
ご冥福をお祈り申し上げます。



酒井オーナー書